

35 前野良沢（蘭化）の自画像とオランダ馬具について

松尾 信一

『解馬新書』嘉永五年、一八五二の引用書目のなかに『解体新書』や「計都留伝」がある。ケイズル（ケイゼル）は八代將軍吉宗の時代に、渡来したオランダの調馬師で、江戸城内や浜御殿で、オランダ馬術を演習し、その絵図も現存している。当時、ケイゼルに質問した馬の飼養法、調教法やオランダ馬医書の和訳本が「阿蘭陀馬書」別名「計都留伝」享保十年（一七二五）以降が現存している。その大部分は今村明恒『蘭学の祖・今村英生』朝日新選書(4)一九四二年、のなかに「西説伯樂必携」として収録されている。

一方、『解体新書』の阿蘭訳官吉雄永章（耕牛）の序に「阿蘭之國精乎技術也…造化之大…中津官医前君良澤者問余乎崎陽余視之豪傑士也其学之也黽勉孜孜終日…出

藍之器…」とある。

演者は一九七四年八月の『解体新書』出版二百年記念研究発表会と展覧会（医史学会と蘭学資料研究会主催）に出席し、前野蘭化の自画像の前面の物品について不詳であることを知った。

前野良沢（一七二三—一八〇三）については岩崎克己『前野蘭化』一九三八年、が最も詳しい。

ところで、本学会木村陽二郎名誉会員は「前野蘭化の自画自賛について」本誌三五巻四三〇頁、一九八九年、に論文を発表されている。そのなかに、岩崎の著書で「自画像の前面に、馬の腹帯みたいなものと一緒に、ビール壘二本をその中腹において切断し、上半を縄でひっからげたような奇態なものが並んでいる」と記し、三宅秀の説明では、これは革で作った和蘭馬具であり蘭化は馬匹改良にも力を尽したのであらうという文を引用した後、岩崎自身は「先にビール壘と思つたのは鑑（あぶみ）の後である」と記しているとある。

木村先生は一九七六年十一月、シーボルトと親交のあった下関の伊藤家を会員武野琦一郎、緒方富雄、小川鼎

三の諸先生、広田寿亮氏と訪問し、長崎で画かれた西洋の物品のなかに、前野蘭化の画にある馬の鞍にとりつけるピストル入れと鞍の腹帯を見、さらに、林通幸(柳圃)『海国兵談補遺』下巻、慶応三年(一八六七)の図を見て、上記を確認したと記してある。

さらに、木村先生は伊藤家の馬具やピストル入れの図は、文化元年(一八〇四)長崎に来たロシア使節レザノフが持って来た馬具の図ではないかと推論されている。

演者も木村論文で、前野良沢の自画像の図はピストル入れであることを知った。一方、蘭研時代に、緒方富雄編『伊藤奎之允関係文書図録』一九七七年、を入手していた。

演者は以前から近藤守重(重蔵)が寛政八年(一七九六)に長崎で写した「荷蘭馬具図」(国立公文書館内閣文庫蔵)や享保十二年(一七二七)「阿蘭陀馬具並飾馬図」(松浦史料博物館)の絵巻物の黒色のピストル入れなど観察していた。

先年から津山歴史民俗博物館の「享保年間ケイセルリング和蘭馬具」(白黒写真)について調査した。

それらは牧天穆訳『騎操軌範』安政三年(一八五六)の図と同じ原図であった。

今回、手もとのオランダ馬具関係の資料を調べてみた。その結果、伊藤家の鞍とピストル入れの図は、近藤守重(内閣文庫蔵)と松浦史料博物館のオランダ馬具と同じ原図であることが判明した。一方はカラー、他方は白黒であった。「荷蘭馬具」近藤守重は、ピストル入付の鞍をつけた白馬の左側絵図、轡衝など、鞍全形 *Zadel* (腹帯付)、馬上前用之短炮ノ筒但鞍前二着ル *Pistool* *holder* の裏面と表面の絵図、障泥ノ類、馬二騎ルモノ着ル所ノ杓、スポール *Spooren*、ホルストカップ短炮之筒覆などの絵図がある。松浦史料博物館の同種の図にはカナ文字はあるが、オランダ文字が入っていない。

他方、『騎探軌範』系の図、「西洋馬術叢説」の附録図(尊経閣文庫蔵)や「海国兵談補遺」の図は伊藤家の図と異なっていた。

結局、前野良沢の自画像の物品はオランダの馬の鞍の腹帯とピストル入れの表面と裏面の図である。

(横浜市)